

**O-061** 当院における VATS major pulmonary resection 症例の検討

東京都済生会中央病院 呼吸器外科

大塚 崇, 野守 裕明, 堀尾 裕俊, 成毛 詔夫,  
末舩 恵一

1999年8月から2002年12月までの当院における video-assisted thoracic surgery (VATS) major pulmonary resection を施行した107例を検討した。【対象】男性71例, 女性36例, 平均64歳。【結果】95例は胸腔鏡下手術を最後までを施行し得たが, 12例(11%)は開胸への convert を要した。平均手術時間は  $267 \pm 70$  分。術式は lobectomy 88例, bilobectomy 1例, segmentectomy 6例。組織型は腺癌 68例, 扁平上皮癌 13例, 腺扁平上皮癌 4例, 小細胞癌 2例, その他の肺癌 3例, 転移性肺腫瘍 3例, その他 2例。肺癌の病理病期は I A 57例, I B 13例, II A 4例, II B 5例, III A 6例, III B 5例。術後合併症 10例。周術期死亡 1例(術後肺炎)。術後合併症のない症例での術後平均在院日数は 7.6 日。非小細胞癌 81例での 3年生存率 91%, 非小細胞癌 I 期 51例での 3年生存率は 98% (平均観察期間 20ヶ月, 観察期間 6ヶ月~40ヶ月)。【結論】肺悪性腫瘍に対する VATS major pulmonary resection は安全な術式で標準手術となりえる。

**O-063** 大学病院呼吸器外科における肺癌に対する鏡視下肺葉切除術臨床修練の検討

東北大学加齢医学研究所呼吸器再建研究分野, いわき市立総合磐城共立病院呼吸器外科

松村 輔二<sup>1</sup>, 菅原 崇史<sup>1</sup>, 岡田 克典<sup>1</sup>, 島田 和佳<sup>2</sup>,  
遠藤 千顕<sup>1</sup>, 星川 康<sup>1</sup>, 鈴木 聡<sup>1</sup>, 佐藤 雅美<sup>1</sup>,  
近藤 丘<sup>1</sup>

【目的】鏡視下肺葉切除術の修練システムについて検討。【対象・方法】過去5年間に肺癌に対して鏡視下肺葉切除または区域切除を施行した89例を対象。前期35例はリンパ節郭清検証のため術者を数名に固定。後期54例は専門医が5-30例の術者経験後, 卒後4-12年の外科医も含め17名が術者。前期と後期の開胸への移行頻度と理由, 外科的合併症と頻度について検討した。【結果】前期開胸移行は出血1, リンパ節固着4, 癒着1, その他1計7例(20%), 合併症は反回神経麻痺5, 肺漏10計11例(31%)。後期開胸移行は出血4, 癒着6, 葉間不全1, その他2計13例(24%)。合併症は反回神経麻痺1, 肺漏16計17例(31%)。出血は PA2, PV1, BrA1, SVC1。出血は後期前半3/26(11.5%), 後期後半1/28(3.5%)。胸腔内癒着による移行は高度癒着6/7, 中等度癒着1/5。【考察】前期は郭清のための開胸移行, 合併症を経験したが, 後期は郭清のための合併症はなく手術手技の合理化が伺われた。術中出血は術者拡大により増加したが, 経験の蓄積に伴い減少した。鏡視下肺葉切除術は標準手術として修練可能である。

**O-062** A case of pulmonary sequestration resected by VATS

尾道総合病院 外科

倉西 文仁, 黒田 義則, 岡本 有三, 豊田 和広,  
中原 雅浩, 和田 秀一, 田原 裕之, 高倉 有二,  
谷本 新学

【はじめに】肺内型の肺分画症に対して VATS にて部分切除を施行し得た症例を経験した詳細を報告する。【症例】42才, 女性 H7 より突然の発熱 (38.5℃) ありすぐ軽快していた。2回/年の間隔で発熱を認めていた。H10 検診にて chest x-p 上異常所見あり, HRCT にて肺分画症 (肺内型) と診断された H13.8 発熱 (38.5℃) あり短期間に軽快しないため手術を決心し入院となる。【検査所見】血液検査上は CA19-9 = 218.1 と上昇している以外に異常を認めない。胸部 x-p 上左下肺野 (心陰影にかさなり) に腫瘍を認め, CT, MRI 上 Aorta から直接動脈が流入し, 奇静脈へと還流する肺内型の肺分画症と診断された。血管造影では同様の所見であった。【手術所見】全麻下に右側臥位にて第7肋間にて小開胸し流入動脈, 静脈の順に血管処理を行い, その後部分切除を自動縫合器を使用して行った。【経過】術後経過は良好であり術後3日目に退院可能であった。【結語】肺分画症は肺内型の場合葉切除も必要となる事がある。この症例では部分切除のみで術後合併症もなく経過しており, 視野が充分確保できれば VATS による部分切除は試してみる方法と考えた。

**O-064** 前縦隔腫瘍に対する剣状突起下アプローチによる胸腔鏡下手術症例の検討

大阪市立総合医療センター 呼吸器外科

東条 尚, 多田 弘人, 山本 良二, 池田 直樹,  
林 明男

【目的】前縦隔腫瘍に対して剣状突起下からアプローチすれば最短距離で腫瘍に到達でき, 左右にまたがる病変にも操作が容易で, 胸腔を経由しないので胸腔内癒着を懸念する事もなく, そのままの体位で胸骨正中切開に変更できるという利点がある。今回前縦隔腫瘍3例に対し同アプローチによる胸腔鏡下手術を行ったので報告する。【対象】当院で胸腔鏡下に手術を行った縦隔腫瘍は48例で, うち3例に対し剣状突起下アプローチにより手術を行った。手術適応は他臓器浸潤のない症例で, 術前診断は thymoma が1例, thymic cyst が2例で, 年齢は53歳, 46歳, 66歳で, 3例とも男性であった。手術は仰臥位・開脚で行い, 剣状突起下に約5cmの皮切を加えそこからラパロリフトを挿入し胸骨を挙上し, 他孔から挿入した胸腔鏡下に手術を行った。手術時間は125, 155, 89分で, 出血量は40, 10, 10mlであった。摘出標本の大きさは2.5, 5, 6cm, thymoma 1例, thymic cyst 2例であった。術後3日間の鎮痛剤使用回数は  $4.3 \pm 1.1$  回で, 入院日数は4, 6, 5日であった。【まとめ】前縦隔腫瘍に対して剣状突起下からアプローチする胸腔鏡下手術を3例に行った。3例とも術中術後合併症はなく安全に手術を行えた。